

アユの資源と漁獲状況について

1. アユ苗の漁獲状況

- 1月10日から1月31日までの累積漁獲量は 3,124kg。
- 1月のアユ苗注文量は3,900kgであったが、養殖業者の池が充足したため上記で終了。

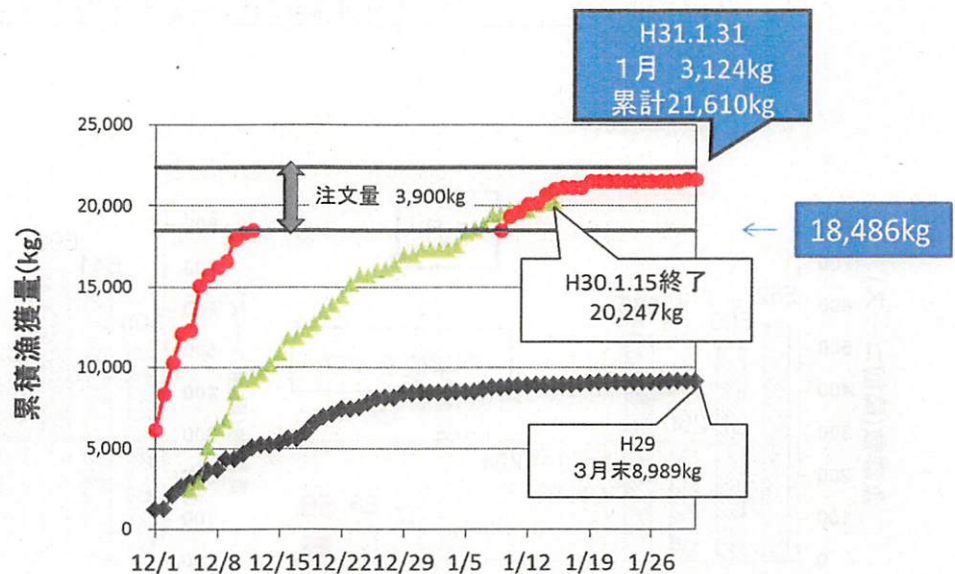


図1 記録的不漁となった平成28年以降のアユ苗漁獲量の推移

- 鮮魚を含めた1月のエリの漁獲状況は、大きいサイズが漁獲された漁協では、1日1統あたり20kg程度と平年並みであったが、サイズが小さい漁協では、10kg程度で平年より少ない状況。
- 2月のエリによるアユ苗漁は、養殖業者の池の充足が続いているため、数日おきにしかな集荷されず、7日間のみ操業され、累計で339kgの漁獲。
- 鮮魚を含めた2月のエリの漁獲状況は、平年並みの漁協がある一方で、平年より少ない漁協も多く、全体としては低調。主に鮮魚として漁獲。
- 2月だけ解禁されるアユ沖曳き網漁業では、操業は1隻のみであるが、1日で40kg～50kgの漁獲でやや好調。
- 刺網では1日1人10kg～20kg程度が漁獲されており2月の漁獲としては平年並み。
- 全般的に見ると、1月以降のエリの鮮魚を含めた漁獲は、例年より少ない状況。
- この原因としては、アユの体型が平年より小型で推移しているためであると推定。
- 2月後半になって琵琶湖西部でエリの漁獲が増加傾向。

2. アユの資源状況

【周回コースによる魚群調査結果】

○1月期を1月16日、17日に実施、2月期を2月13日、14日に実施。

○1月の魚群数は56群で、不漁であった平成29年の1.5倍、昨年の85%であるが、平年の277群に比べて20%と少ない。

○2月の魚群数は111群で、不漁であった平成29年の1.8倍、昨年の1.3倍であるが、平年の294群に比べて38%と少ない状況。

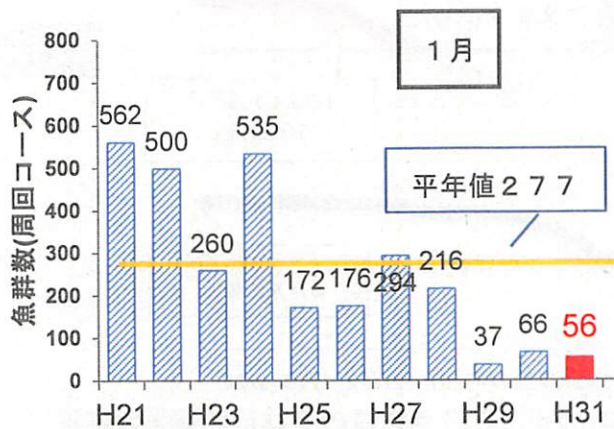


図2 1月の魚群調査結果の経年変化

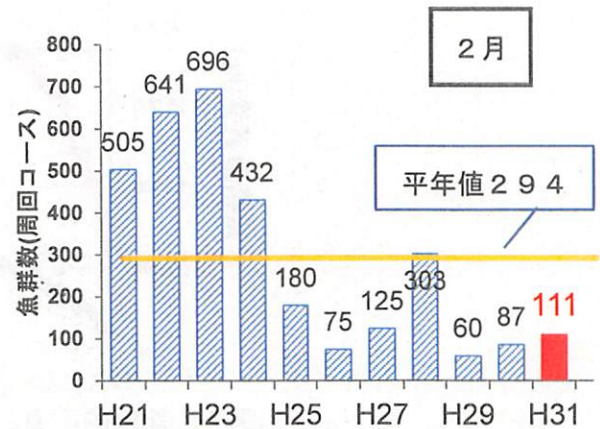


図3 2月の魚群調査結果の経年変化

表1 月ごとのアユの魚群数の比較

	1月		2月	
	小群換算値	平年比	小群換算値	平年比
H29	37	11%	60	20%
H30	66	24%	87	30%
H31	56	20%	111	38%
平年	277		294	

【アユの体長】

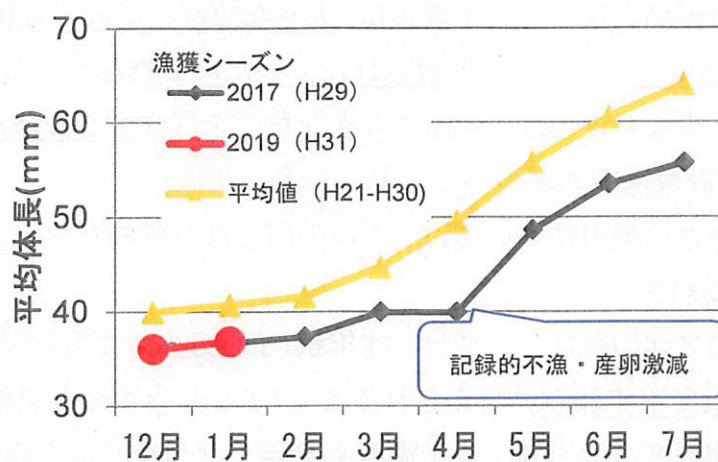


図4 エリ漁獲アユの平均体長の推移

○今シーズンは平均値より小さく、現時点では記録的不漁年であった平成29年シーズン(平成28年12月～翌年8月)と同等の推移

【アユの肥満度】

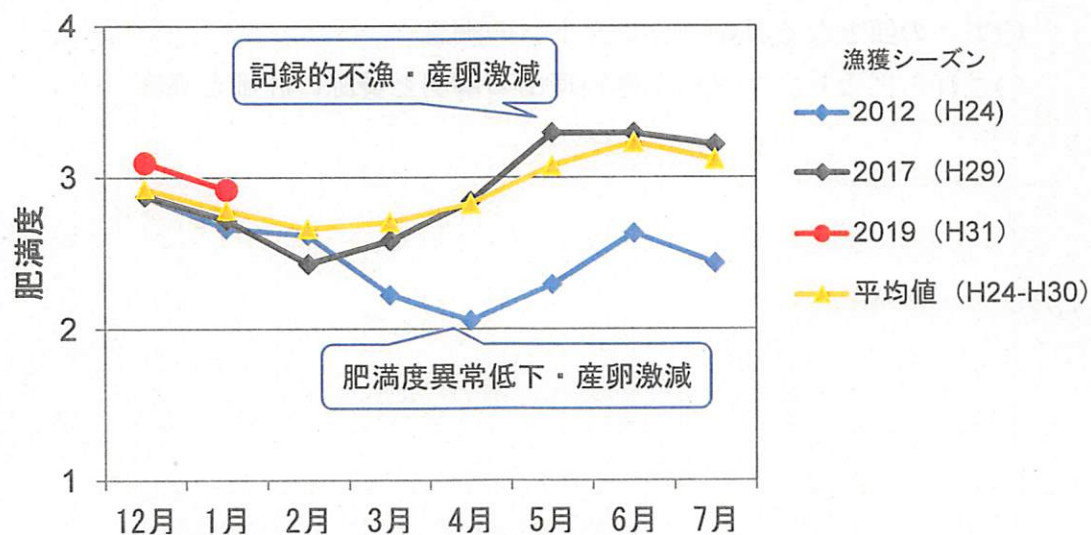


図5 エリ漁獲アユの肥満度の推移

○今シーズンは、平均値よりやや高く、記録的不漁であった平成29年と異なり栄養状態は良い。

【まとめ】

- エリの漁獲が低迷している理由は、大きな魚群を形成する体長40mm以上の個体が少なく、まとまって漁獲されにくいためと推定される。
- 魚群数が少ない理由は、同様に大きな魚群を形成する個体が少ないためと考えられる(計数基準未満の小さな群れが多い状況)。
- 体長が小さい理由については、アユの餌となる動物プランクトンとの関係等について検討中。
- 琵琶湖のアユの数については、昨年秋(10月～11月)の湖中仔アユ生息状況調査結果で平年並みと考えられること(12月当委員会で報告済)、その後の冬季の水溫は平年より高く、肥満度も平年よりやや高いため、低水溫による冬季の減耗は考え難いことから、現時点でも平年並みと推察している。

3. 今後の対応

- アユの耳石解析による成長状況(成長履歴)の調査
- アユの餌となる動物プランクトンの調査
- これらにより、アユが小さい理由の解明と資源の評価を実施